

漢法苞徳塾資料	No. 167
区分	治療・鍼法
タイトル	杉山真伝流・十八基本手技 表之巻第五
著者	八木素萌
作成日	1997.06.16 1982 加筆改定

杉山真伝流・十八基本手技 表之巻第五

1：雀啄

〔主治〕

五積六聚・癥瘕・疝癖・血塊・諸痛忍びざる症・癥瘕の新久を論ぜず・心腹疼痛し上気し腰脇痛み大小便難きもの・諸病症に因りて之を行なう。

〔手技手法〕

直に鍼を下し深淺は宜しきに随うべし、進入の部分に雀の啄ばむ如くに連続す、久しく連続すること雀の啄ばむに似る故に之を名づく。口伝あり。

2：随鍼

〔主治〕

五蔵不調・三焦不和・脾胃虚弱・或は陰虛火動・咳嗽発熱・盗汗・痰喘腎虚・或は虚の大便秘瀉或は骨蒸の肌肉消瘦し四肢煩など一切の虚症・氣渴などに皆症に臨んで之を施すべし。

〔手技手法〕

呼吸に随いて鍼を進退せしむ・呼に進鍼し吸に退鍼し・深淺は宜しきに随うべし。其の応ずるもの浮べる水中の大石の如し・快然と呼吸の氣に随う故に随鍼と名づく。仕法に口伝あり。

3：乱鍼

〔主治〕

乾霍乱・心服胞脹れ絞痛し、吐せず瀉せず脈沈にして絶えんと欲す。或は一切の服痛或は乍ち痛み乍ち止み・或は脚氣衝心し、煩悶して人を識らず、或は奔豚・小服氣・臍腹太いに痛み或は七疝卒痛・一切の痛み忍ぶべからざる等の症に此の術を与うべし。

〔手技手法〕

直に部分に刺入し其の鍼を引き皮分に退いて後に入れ或は進め或は退き或は早くし或は早からず或は撚り或は撚らずして刺入し或は揃え或は前に撚り或は後に然し一つも定まらず乱るるなり。故に名つけて乱鍼と謂う。

4：屋漏鍼

〔主治〕

風寒温の三気合して腠理に客するときは皮膚麻木不仁す、是れ肝氣の行らざる故なり、経脈に入れば筋痺脈痺の候を為す・口開き手散じ眼合い遺尿するは臟府に入るの候・此三段に別つ・氣を得と得ざるを候がえ、風病の各一端を例と為す。餘の病は類を以て推して之を取るべし

〔手技手法〕

鍼入ること五分は皮毛腠理の分・また刺入すること五分は肌肉の分・亦刺入五分は筋脈の分・然るときは三五の一寸五分なり、鍼は六分は其の1分なり〈アマトトハ竜頭ノコシ置クヲ云ウナリ〉。皮毛腠理の分に刺入して天氣を伺いて留むること一二息す而して後雀啄の象の如くし・亦刺入五分にて人部の氣を伺がい亦留むること一二息亦雀啄の象の如くし、又刺入すること五分にて地部の氣を伺いて又留むること一二息して後雀啄の象の如くす。

5：細指管

〔主治〕

風寒暑温之きて腠理に巻き皮膚の間に客し常に滞りて諸痛を為し者に細指之を主る

〔手技手法〕

管無く与うと言えども鍼を管に入れ痛処（病処）に当てて管より上に管切に一二百之を弾く（爪く二三百これを弾く）（管切にこれを用ゆ）数多きを以て佳と為す・細とは指を以て細かに之を弾く。名づけて細指と曰う。口伝有り。

6：四傍天

〔主治〕

痰鬱胸膈利せず・或は一切の胸膈痞えるもの・胸中に痛あるもの・並びに嘔吐・悪心するもの・また肺管病に中腕穴において之を治す。類する一身は皆之に従う。

〔手技手法〕

夫れ人に天地人の三気有り、乳より上を天と為し、胸より臍を人と為し、臍より足爪に下って地と為す。然なれば則わち天に三才有り地にも三才有り人にも三才有り、又曰く人南面すれば左は陽と為り右陰と為る。故に人の左上は天の天部と為して陽中の太陽応ず。人の右上を天の地部と為して陽中の太陰応ず。人の上の中間は天の人部と為りて陽中の少陽応ず。人の左下を地の天部と為して陰中の太陽応ず。人の右下は地の地部と為して陰中の太陰応ず。人の下の中間は地の人部と為りて陰中の少陰応ず。人の左横上は横の天部と為し陽中の陽応ず。人左横下は横の地部と為して陽中の陰応ず。人左横中間は横の人部と為して陽中の少陽

応ず。右横上を横の天部と為して陰中の陽応ず。右横下は横の地部と為し陰中の陰応ず。人右横中間を横の人部と為し陰中の少陰応ず。此の如く配す故に仮令えば中腕穴の如く鍼を左の不容に向かい鍼を先に天部に刺し、其の鍼を皮部に引き退け、また左の承満に向けて刺すを横の天部と為す。又其の鍼を皮部に引き退け又右の不容に向け刺して天部と為す。また右承満に向け刺して横の天部と為す。右一鍼を以て天部に四本立つる、故に四傍天術と曰う。

7：四傍人

〔主治〕

左に向かえばよく気を和し、右に向かえば能く食を和す、膈中雷鳴し、察々隠々と常に水声あり、胸脇煩満し胸熱し息奔す、胸下の気上り腹部を衝く。病直に皆治すに宜し。参考すべし。

〔手技手法〕

仮令えば中腕に鍼するに鍼先を承満に向け刺し而して後皮部に引退け又鍼先を梁門に向け刺し而して後又皮部に引退け刺し而して後其次を太乙に向けて刺す。又諸穴を刺すも皆然り。左右もまた同じ補瀉浅深宜に随う。主治一腹痛・五積・溜飲・霍乱・虚下痢・劳瘵・皆之を補す。四肢においてはよく筋急を治す。 ☆

8：四傍地

〔主治〕

腸鳴り臍を挟んで痛み久立すること不能・小便難小腹痛み大便秘闕し或は腰痛す。中腕穴に之を治す・一身の中に類すは之を参考すべし。

〔手技手法〕

此の手術四傍天の例に随う、刺しよう上に向くると下に向くると意異なり。主治一臍より以上に於て臍より以下の病を治す例よく考うべし。☆

9：三調

〔主治〕

鍼入ること一分・肺気を補瀉す・鍼入ること二分脾気を補瀉す・鍼入ること三分腎気を補瀉す。曰く実は氣有り、虚は無しとは是れ則ち肺気脾気腎気に一鍼を以て三部の気を調う・故に三調と曰うの主治なり

〔手技手法〕

曰く鍼入の一分は天地の気を知る。鍼入の二分は呼吸の出入上下の水火の気を知る。鍼入の

三分は四時五行五蔵六府逆順の気を知る。此の法は入鍼一分にて鍼を押手とともに之を押し留むること一二息して肺の虚実を調う。又肉分に進入の時は呼に鍼を入れ吸に鍼を持し、部分に至って留鍼し之を調うるは、水火の気陰陽の気なり。又鍼一分を直鍼に進入し五蔵六府の逆順を之調気す。故に命けて三調の術と曰う・浅深は宜しきに随うべし。

10：気行

〔主治〕

風寒温の三気相に合して経に留れば気臟腑に逆す。故に気行の術を与えて経絡をして臟腑に配せしむ。気逆腹満・小便不利・腹鳴溏泄し食飲不ず食後に吐水す・男子陰経痛む・妊娠胎動横生悪露行らず血量し人事を省りみざるに。皆この術を与うべし。曰く気臟腑に逆す鍼能く治する所以・故に之を補うと云う。

〔手技手法〕

左手を以て痛所の兪穴に当て、右手を以て鍼を下ろして後、中指を大指の方へ立て、食指を以て竜頭を打ちつければ則ち気行くこと早し。故に気行と曰う。

11：三法

〔主治〕

一に齊刺と曰う齊々と三刺す一鍼を以て三刺に齊しくす、故に三刺と曰う。予が門は毎に一鍼にて法を与う故に命けて三法と曰う。曰く寒気小深の者寒熱を作す、寒気の気痺なり、寒気の経に入るを痺と謂うの意なり。痛皮膚の間に在れば三刺するのみ、又曰う痛傍に在るは皆之に取れと

〔手技手法〕

直に其の鍼を入れて皮部に引き退け一刺を前にし一刺を後ろにす、一鍼にて三鍼を行なう。曰く齊刺・直入一傍入二なり、或は三刺と曰う。

☆直に鍼を入れ皮部に引退け又左に直にその鍼を刺入れ而のちまた皮の部に鍼を引退け而後又右にその鍼を刺入れて而抜くなり浅深は宜しきに随うべし。主治寒気微に深き者☆

12：円鍼

〔主治〕

円々と意に循がうなり。外瀉内補の鍼なり。外実内虚の症に与うべし余は病に臨んで之を詳らむべし

〔手技手法〕

円々として左手を兪穴に当て右手を以て下鍼の時鍼と押手と病者の皮膚と共に^{まど}円かに刺入するなり、引き退ぞく時も同じ。

☆…鍼を刺し入れ押手と鍼と皮と共にまろくす ☆

13：温鍼 ☆内温之鍼

〔主治〕

精気あり穀気留まり邪気独り出る意、専ら痛症に与う・余は症に臨んで之を行なうべし

☆主治－精気不調者☆

〔手技手法〕

直に刺入せる鍼を部分に至らしめ押手をもって或は前或は後ろ左右に押して引き退くるなり。曰く按じて鍼を引くとは是れ内温と謂い、血散ずるを得ず。氣出ずるを得ずとは即ち此の^{こころ}意なり。

☆…直に鍼を刺入れ其鍼口の傍を或は上或は下或は前或は後ろ押手をもってこれを押して之を抜く…☆

14：暁鍼

〔主治〕

諸の皮節痛なり、疝心痛錐に刺さるる如し。甚だしき者は久瘡已まざる者。五癩・婦人月事不調・嘔吐胸満食嗜まざる者は皆之を与う。

☆主治－諸経病☆

〔手技手法〕

鍼管に入れ穴上より之を弾く。其管を取って鍼を二三分入れ、又それを管に入れて細指の状の如くし。又その管を取りて刺して二三分入れ、又それを細指の状の如くし、宜しく部分に随うべし。引き退くの鍼時もまた此の如くす。暁の旭なり沃入の儀なり。故に暁術と曰う。

☆此の術まず鍼をすこしく刺し管に入れ皮を切るように久しく之をたたき又其管を取り鍼をすこしく入れ又右の如く管に入れ之をたたく是れを暁の術と言う。☆

15：内調

〔主治〕

吐逆し食下らず胃中冷氣あり心下苦満・急痛し痰飲喘息吐血し水漿下らず・痢疾裏急衄血に、余は病に随い之を詳らかにすべし

☆主治モロモロの氣鬱 ☆

〔手技手法〕

直に鍼を三四分刺し管を以て鍼つまみし処之を弾く。又三四分管つまみし処をもって之を弾く。弾く度々之を行なうべし。部は宜しかるべし。引退の時も又此の如し。按ずるに調和なり。以て和腠理血す・脈血脈筋骨、内調術と命ず。

☆此の術直に鍼を刺して其鍼を留めその鍼の傍を指先をたたく。これを内調の術と云う ☆

16：氣柏

〔主治〕

大腹痛み四肢厥逆し或は転筋す等の症余りあるべし病に依る者に参考可なり

〔手技手法〕

直に鍼を刺す。部分は宜しきに随うべし。管を以て管鍼の傍之を弾く。留むること三四息して之を転じ、又鍼傍に当て之を弾く。氣を得るを以て故と為す。

17：竜頭

〔主治〕

心下の痞梗満脇下に引く一切の虚・腫・逆噎・水腫並びに一身浮腫して胃脘痛み寒熱して服むこと大に食嗜のまず・傷寒発狂振寒して汗出ず・或は胃瘍先寒後熱し・善んで日光を見う火を得て乃わち快然たり。腹脹満皮膚痛す或は四肢厥逆す等に此の術を与う。

☆主治諸肉病 ☆

〔手技手法〕

直に鍼を刺す部分は宜しきに随うべし。留鍼して之を取り、手して又左を取り、手して後右手を以てす。大指食指爪軽く竜頭を弾き、振うを以て佳しと為す。按ずるに竜頭重きこと勿れ施し難し。此の故に角竜頭を用う。

☆此の手術は先ず鍼を入れ捻手を取り又押手を取り而して後右手の指先の爪を以てこれを弾く ☆

18：熱行

〔主治〕

一切の冷病に皆この術を与う病の軽重を問うなかれ

☆主治諸病に用う。たとえば鍼刺家日用の義に専一たるものなり ☆

〔手技手法〕

先に鍼刺せんと欲するの時左手を以って穴上に於て或は爪し或は按じ或は摩で或いは弾く而して後刺入す鍼部分に至れば或は留め或は動じ或は撚る。此の如きときは則ち氣至ること速し・氣至るときは熱す。故に熱行と曰う。各荒きこと勿れ荒くば則ち乱状と成る。

☆此の術先ず鍼を刺さんと欲する時左手を以て刺処の穴に於て或は爪み或は按じ或は摩し或は^{なた}弾き而して後鍼を刺し入る或は留め或は動かし或は捻りかくの如くすれば則鍼下氣至る甚だしこれを熱行の術という ☆

1997・06・16

- 1：杉山真伝流表之卷第五之上（オリエント出版臨床実践鍼灸流儀書集成1）
〈吉田弘道・大貫伊・森田蒿英などによる杉山真伝流保存会が同流 62 代高弟馬場美静氏に秘書 30 卷を借りて謄写したもの―森田蒿英氏の序言―〉を訓読したもの
- 2：上の記述では分かりにくい部分や多少異なる処のみられる部分については、オリエント出版臨床実践鍼灸流儀書集成 2 の中の杉山真伝流鍼治手術詳義―藤波氏所蔵の大沢周益筆―和田一口授―より補足した
- 3：平成 9 年 6 月(1997.06) ☆印に挟んでを馬場美静氏本との違いを記した。
- 4：引用訓訳…八木 素萌～昭和 57 年（1982）漢法苞徳塾資料に加筆改定した。